動　向

インド地図学史に関する サーカーとフィリモアの労作

海野一隆

はしがき

周知のように、残された記録類の少ないインドでは、考古学的な遺跡や遺物は別として、インド自体の史料による歴史の再構成が、甚だ困難である。この点地図の歴史においても例外ではない。そのためかインド固有の地図学を解明した文献に接することは、殆ど稀である。こうした状況の中で、ここに紹介するサーカーの論考は、短かいものながら一つの展望を与えてくれる貴重な文献といえよう。もっとも極めて荒いデッサンに過ぎないから、これによってインドの地図学史が通観できるわけではないが、今後の研究に手掛りとなる点が多い。

さてその論考というのは、彼の論文集たるD. C. Sircar: Studies in the Geography of Ancient & Medieval India, Delhi, 1960 の中の一篇 XXII Cartography (pp. 246～250) である。これはもと The Indian Archives, Vol. 5, No. 1 (1951) に、Ancient Indian Cartography と題して発表されたものであるが、[1] それは同じ雑誌の四巻一号（一九五〇年）に掲載されたフィリモア (R. H. Phillimore) の「インド固有の地図」(Indigenous Indian Maps) という書簡に応えたものであった。フィリモアには、書簡の内容と多少関連する左記の如き二篇の短報があり、それらはともにインドの古地図を解説する。

Early East Indian Maps, Imago Mundi, Vol. VII, 1950

Three Indian Maps, Imago Mundi, Vol. IX, 1952

従ってここでは、先ずサーカーの論考の発端となったフィリモアの書簡の内容を紹介し、それとの関連もあり、かつ貴重な資料を提供する前記二篇の短報の要点を記したのち、サーカーの論考の全訳を掲げ、これに図版および訳注を加えることにしたい。なおこれら両人が引用する文献の中には、閲覧が容易でないものがあるので、そのすべてに当たったわけではない。筆者未見の文献のわが国での所在について、教示が頂けるならば、まことにありがたい。

フィリモアの労作

前述のフィリモアの書簡は、一九五〇年一月三一日付と同年三

月二一日付の二通にわかれていて、どちらも大変短かいものである。前者には、ヨーロッパから、インド固有の地図に関する情報についての質問があったとして、彼の著書「インド測量局史録」(Historical Records of the Survey of India　以下 H. R. S. I. と略称) の第一巻に言及したという

イブン・ハウカル (Ibn Haukal) の地図 (H. R. S. I. 図版第四、Elliot & Dowson: History of India as Told by Its Own Historians, Vol. 1 より転載)

Gladwin: Ayeen Akberry 所載ヒンドゥ地図 (H. R. S. I. 二〇八頁の注四)

イスタカリ (Istakhari) のアフガニスタン地図 (H. R. S. I. 二二〇頁、Transactions of the Bombay Geographical Society, Vol. II, 1844, pp. 58~72)

などを見本として挙げ、こうした古地図特に一七世紀以前のものに関する情報を歓迎すると述べる。またインド測量局には、この種の地図がいくらか蔵されており、「インド測量局史録」の一〇頁の注五に、その関係記事があることを指摘する。

あとの書簡では、古地図研究誌「イマゴ・ムンディ」(Imago Mundi) の編集者バグロフ(L. Bagrow)からの来信中の、インド地図学に対する感想の部分の紹介と、史料の補遺を行なっている。新たに紹介された史料は、

ヘースティングス (Warren Hastings) に贈られたネパールの古地図②(H. R. S. I. 第一巻二〇八頁)

バラモンの世界図③(H. R. S. I. 一六一頁、Gladwin: Ayeen Akberry 第一巻の口絵および第二巻三四九―五〇頁)

の二点である。

次にフィリモアが「イマゴ・ムンディ」誌に発表した前掲の二篇の短報であるが、以下簡単に一九五〇年のものを短報一、一九五二年のものを短報二と呼ぶことにする。先ず短報一では、次に挙げる如き史料が手短かに解説される。なお、それには図版は全くない。

一七八七年の Seiks 国地図

デリーのムガール王宮で発見された資料により、一七八七年リンド(Rind)④が描いたもので、粗雑ながらパンジャブの五河川がはっきりとわかる。この図がやや改訂されて、一七九二年のレンネル(Rennell)⑤の地図 (H. R. S. I. 第八図) となった。

インド測量局所蔵アフガン地図

右の図と同じく、イスラム系の地図で、一八七九~八二年の戦争中に、司令官 (Amir) のために作成されたものである。

図にはカブール（Kabul）州の北部辺境一帯が示される。

シッキム地図

一八八七年のチベット・シッキム戦争の際、チベット軍が作成した図を縮小したもので、チベット風ないしシナ風である。

一八二四年のチベット地図

イギリスのネパール駐在事務官ホズソン（Brian Hodgson）のために、チベットのラマ僧が書いたもので、見取り図風の道順図。（H. R. S. I. 第三巻第一一章）

以上のほか、前述の書簡に挙げるバラモンの世界図は、バロウ（Reuben Burrow）が一七八九年カシプール（Kashipur）で入手したものであろうとし、またバロウが同年ラムプール（Rampur）で見たアブル・ファズル（Abu-l-Fazl）編 Ain-i-Akbari⑥には、主要都市の地理的位置の一覧表が収められていたとする。グラッドウィン（Gladwin）訳の Ain-i-Akbari⑦の第二巻三四九～五〇頁には、バロウがヒンドゥの経度測定法について述べることも指摘する。（H. R. S. I. 第一巻二〇八頁、三一九頁）なお書簡に挙げるネパールの古地図についての Asiatic Researches の中のウィルフォード（Wilford）の言葉を引用するが、同じ箇所がサーカーの論考にも引用されているので、それに譲ることにする。

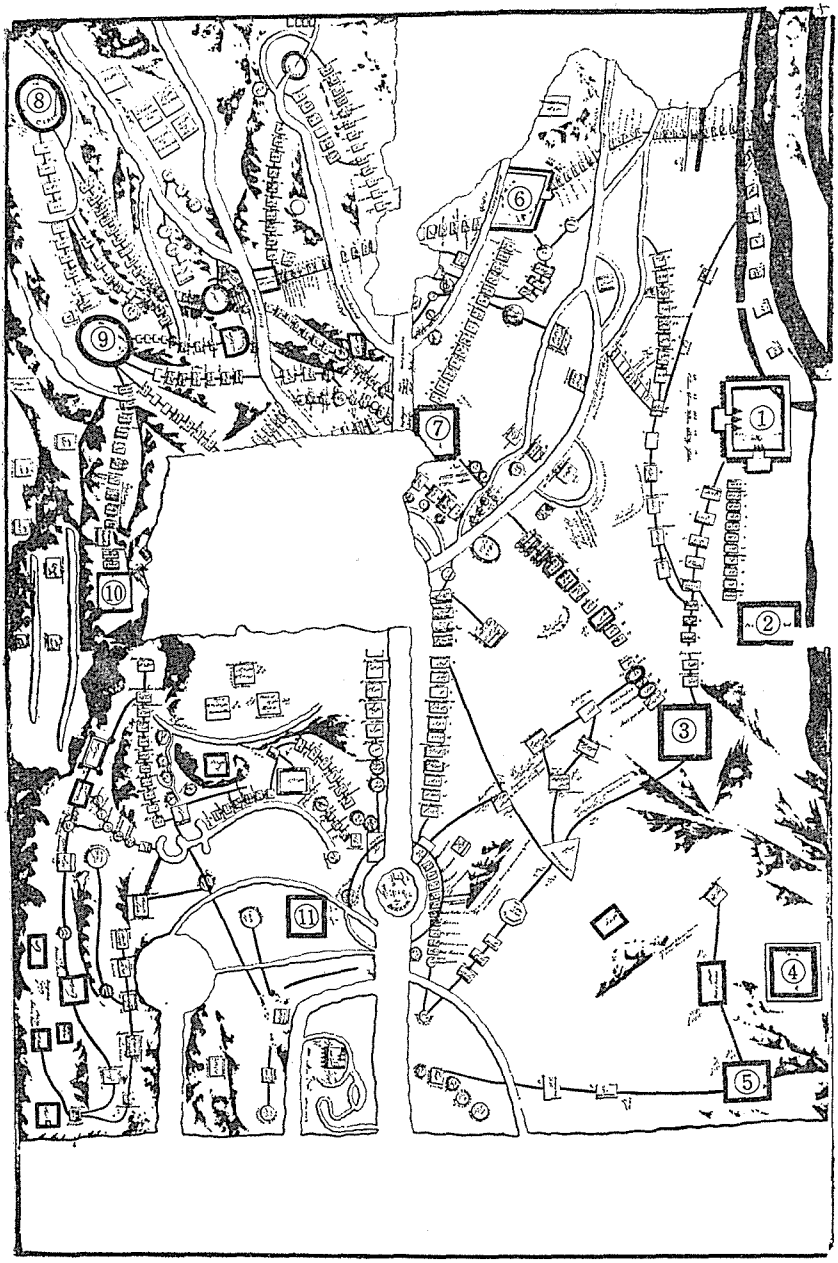
短報二は標題からもわかるように、次の三種の古地図の解説である。以下各図についての説明の要点を示そう。なお地図は三種ともそれに複製されている。

ムガール時代の西北インド・カブール地図（インド測量局所蔵）

デリーのムガール王宮にあったもので、一七八〇年頃原本から写されている。内容から判断して原本は、一六五〇～一七三〇年にできたものであろう。八二・五×七五センチの大きさの紙二面から成り、重なりの部分が約一二・五センチある。東はジャムナ（Jumna）川（ガンジス川の上流）、西は Helmund（アフガニスタン南部）、北はカシミール、南はインダス河口までを含み、地名はペルシャ語で、英訳が付けてある。一七九三年刊のレンネルの 'Memoir' に、〝ペルシャ語のパンジャブ地図によって大いに助かったが、それは土着の人によって書かれたもので、ヒンドゥスタンの政府文書の中に残っていた。地名は故デーヴィ（Davy）少佐によって丁寧にペルシャ語から訳された〟とあるその地図はこれではなかろうか。（彼は地図の内容を細かく検討しているが、煩瑣を避けるために図版をもって紹介に代えたい。次頁の図版参照。）

ベンガル語の Paragana Habraghat（下アッサム）の境界見取り図

下アッサムの Goalpara 地区の税務測量官の一八四九年の通



ムガール時代の西北インド・カブール図
①デリー　②Akbarābād（アグラ）　③アジミール　④ウダイプール　⑤アーメダバード
⑥ラホール　⑦ムルタン　⑧カブール　⑨ガズニ　⑩カンダハル　⑪Sewstām

知書の一頁に書かれていたもので、測量すべき土地の大体の位置を測量官に示すための図である。

マラタ（Maratha）語の北カナラ（Kanara）地図（インド測量局所蔵）

大きさ約一五〇×五五センチで、ゴアに隣接する北カナラから南のAghnashini川までが描かれる。一八世紀末以後のものと考えられる。

以上史料に重点を置いて、フィリモアの労作を紹介したが、要するにそれらは史料の紹介ないしは解説を主とするものであって、地図学史の組立てを意図したものではない。しかし彼によって公にされたこれらの地図が、それぞれに秘めたながい過去を語りはじめる日も遠くはないであろう。

① 新旧両稿を比べてみると、新稿には増補された部分がある。

② この図に関するウィルフォード（Wilford）の解説が、ここに紹介したフィリモアのEarly East Indian Mapsおよびサーカーの論考に引用されている。

③ サーカーの論考に、Gladwin訳Ain-i-Akbari第一巻の瞻部洲図とあるものであろう。

④ フィリモアの短報二によれば、イギリスのインド測量官である。

⑤ レンネルはイギリスにおける初期最大のインド地図作家として知られる。一七四二年生れで、一七六四年ベンガル総測量技師に任ぜられ、一七七七年までインドに滞在した。それ以後一八三〇年（没年）に至るまで、インド地図の作成に力を注いだ。大作ヒンドスタン地図（Map of Hindostan 一七八二年刊）・ベンガル地図帳（Bengal Atlas 一七七九年刊）その他の作品がある。
R. V. Tooley: Maps and Map-Makers, 1962, p. 104.

⑥⑦ アクバル大帝の寵臣アブル・ファズル（一五五一～一六〇二年）が著わしたムガール時代の行政法典。本稿のサーカー論考の訳注（ヌ）参照。

サーカー「古代インドの地図学」

はしがきでも述べたが、サーカーの論考には、貴重な史料や示唆が含まれている上に、ごく短かいものなので、ここに図版と訳注を補って、その全体を紹介する。旧稿はともかく、増補された新稿は、単行本の一章に過ぎず、注目を受ける機会も少ないことであろうから、拙訳もあながち無意味ではなかろう。

訳文

凡例

一　文中に傍記の（1）（2）（3）……は原注、（イ）（ロ）（ハ）……は訳注をあらわす。

一　本文中の（　）内の語句は、原著者のもので、訳者の注記にはすべて〔　〕を用いた。

一　原著には図版が全くないが、地図に関する事柄だけに、必要と思われるものを補った。

一　梵語に関しては苅谷定彦、イタリア語に関しては今川太郎の両

氏（大阪大学教官）の教示を得た。ここに明記して感謝の意を表したい。

梵語には〃地図（マップ）〃に当たるような特別な語がない。現代インド語では、nakshā（アラビア語の naqshah に由来する）という語が、この意味に用いられているが、それはまた絵画・平面図・概括的説明書・官庁報告をも意味する。東インドでは mānacitra という語が、英語の map を指すのに造られている。特に梵語にそうした言葉がないということは、一体地図製作が過去のインド人に知られていたのだろうかという疑問をおこさせる。しかしながら、古代インドでは地図または海図が citra または ālekhya すなわち油絵（ペインティング）・絵画（ピクチュアー）・図解（デリニエーション）と見なされていたと信じられる根拠がある。梵語の citra とその同義語が、実質上アラビア語の naqshah と同じ意味をもつと考えられる。

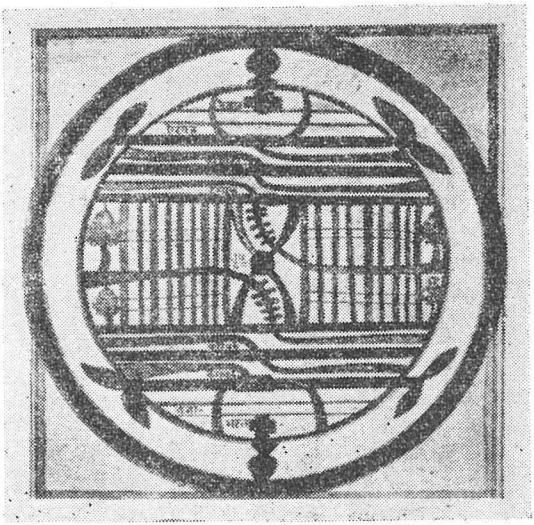
古代インドで地図が作成されていたことは、シナの将軍王玄策の西暦六四八年のインドでの功績を明記する「新唐書」の資料によって明らかである。(1) 千人のチベット兵と七千のネパール騎兵の援助の下に、茶鏄和羅の町近くの戦いで、尸羅逸多（Śrīlāditya-Harṣavardhana）の王位を奪っていた那伏帝阿羅那順を捕え、東インドの王である尸鳩摩（Śrī-Kumāra 一名 Bhāskaravarman）を和睦せしめるとともに、五八〇の城郭都市を降服させたのである。尸鳩摩王のこのシナ将軍への贈物には、三万の牛馬と多数の武器が含まれていたと誌されており、さらに迦没路（Kāmarūpa）王がその国の地図を含む珍しい品をシナ皇帝に献上したと書かれている。(イ) このカーマルーパの地図は、Bhāskaravarman〔尸鳩摩〕王の宮廷の画家の手になるものと思われる。

八世紀に活躍した Bhavabhūti の手になる〔戯曲〕Uttararāmacarita〔ラーマ後半生記〕(ロ) の第一段は〃油絵の閲覧〃と呼ばれる。画家（citrakara）が、アヨードヤー（Ayodhyā）の Ikṣvāku 王ラーマの、ダンダカの森・Kiṣkindhyā（ハ）・セイロン島（Laṅkā）その他の場所での経験（carita）を、遊歩道（vithikā）に沿って描いたという。ラーマを森に連れていった彼の兄弟 Lakṣmaṇa の指図に従って、それぞれの地域を描いたといわれ、ある種の地図と見なしてよいものを含んでいた。その絵のあるものは、Prasravaṇa の丘を示していると思われる。〃絶え間なくひろがる雲によって、暗さが一層ひどくなり、繁った木々の列の故に、一様に柔い青色の縁どりのある森に囲まれた Godāvarī（ニ）川の流れによって、洞穴が鳴りひびく、そうした Janasthāna（ホ）の中心にひろがるその丘を。〃(2) 柔い青色に塗ら

れた森について述べられていることは興味深い。同じ文脈における地図の性質をもつ別の絵は、Lakṣmaṇa によって以下の如きせりふで、ラーマとシーター（Sītā）〔ラーマの妻〕に紹介される。〃Janasathāna の西方に、Chitrakuñjavat として知られるダンダカ森の区域（bhāga）があるが、そこには首のない巨人 Danu が出没する。これは Ṛsyamūka 丘の Mataṅga のすみかの敷地（pada）であり、これはまた Śramaṇā と呼ばれるやつれた婦人 Śabara であり、Pampā と呼ばれる名高い湖でもある。[3]〃

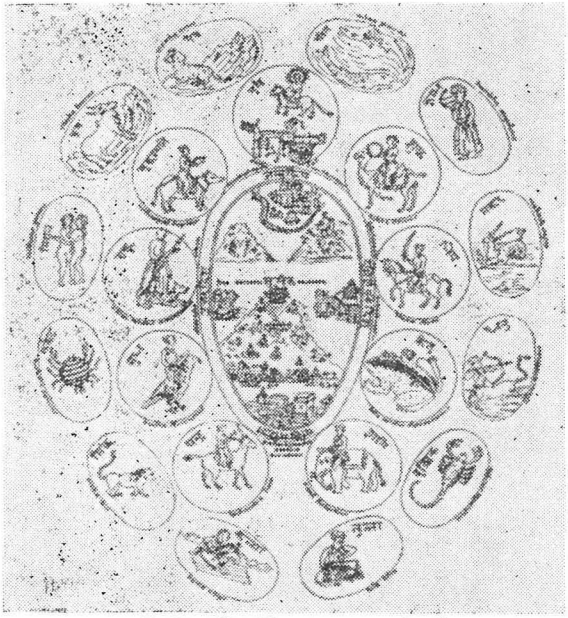
八世紀の梵語戯曲の中の地図らしい絵についてのこの文章は、一世紀半ばかり前にウィルフォード（Wilford）が行なった次のような批評を思い出させる。〃ヒンドゥー人は地理学的小冊子のほかにも、プラーナの説による世界図と天文学者の説による世界図とをもっているが、一般的なのは後者である。彼らはまたインドおよび各地の地図をもっており、それらにおいては経緯度は全く問題外であり、各部分均等の縮尺を用いない。海岸・河川・山脈は直線であらわされる。これまでに見たこの種の地図の中で最良のものは、ヘースティングス（Hastings）[1]氏に贈られたネパール王国の地図である。それは長さ約四フィート、幅二フィート半の厚紙でできていて、山岳は表面より約一インチ高くしてあって、それにはぐるりに樹木が描かれていた。道路は赤線で、川は青線で表現されていた。多くの山脈は狭い峠とともに非常に明確であり、要するに縮尺以外は何も不足するものはなかった。ネパールの谷は正確に描かれていたが、いろんなものが地図の端の方へ押し込められて錯雑していた。[4]〃ウィルフォードによって紹介されたネパール地図は、バーヴァブーティによって言葉にあらわされたダンダカ森のある Citrakuñjavat 地区の油絵と同じ型のもののように思える。ウィルフォードが言及したインドの諸地図は、彼が注釈を加えたように、恐らく外国人によって影響されないものであった。残念なことにウィルフォードは、彼が紹介したインドの地図の古さについては何もいっていない。彼がやや詳述したネパール地図は、それほど古いものではあるまい。

ヒンドゥー思想およびイスラム思想下の初期インド地図学についての多くの知識は、プレ（Francesco L. Pullé）の「インド古代地図学」（La Cartografia Antica dell' India, Parte I）と題するイタリア語の興味ある著作から与えられる。[5] インド資料を扱うその第二篇（八〜四四頁）には、[6]プラーナの宇宙観および地理観に基いて、古代インドの地図学者が作った三種の地図の複製がある。周知のように、世界は中心を同じくする〔円形



Pullé の第8図— Lokaprakāśa 所載瞻部洲図

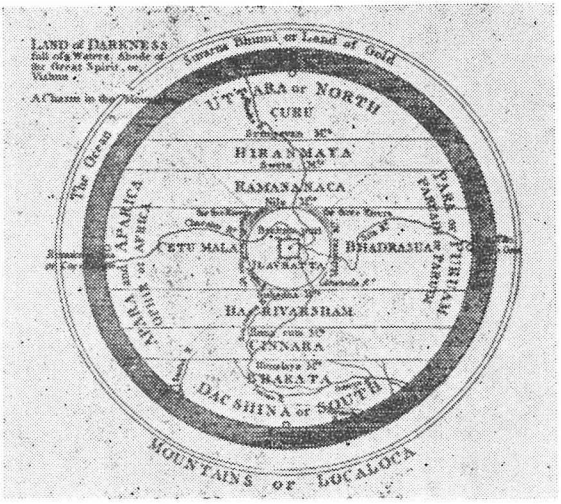
およびそれを取巻く円環状の〕七つの島から成り、それぞれの島は海に囲まれていると考えられた。中心の島は瞻部洲（Jambudvīpa）と呼ばれ、その中で、北をヒマラヤ山脈、残りの方角を海で囲まれる南の地区を Bhārata-varṣa〔インド〕といった。[7] その三種の図の中の二つは、Lokaprakāśa〔世界の解説〕[ト]の写本から複製されたものであり、Lokaprakāśa は最初一一世紀の有名なカシミールの碩学クシェーメンドラ（Kṣemendra）によって作られたと考えられるが、後の改竄が多く含まれる。[8] 一方第三の地図は、[9] Saṃgrahaṇī〔綱要〕[チ]と題される作品の写本から複製されている。すなわちその第二図は中心を同じくする島々とそれをめぐる海を表現し、第八図〔上図参照〕と第九図[リ]は瞻部洲を表現する。グラッドウィン（Gladwyn）訳の Ain-i-Akbarī の第一巻の中の瞻部洲図[ヌ]は、疑なくプレが紹介した



Pullé の第5図— ヒンドゥの宇宙像

Lokaprakāśa や Saṁgrahaṇī の写本に見られる図の原図の如きものから写されている。同様の地図がウィルフォードによって、Kṣetra-samāsa〔大地の構成〕(ル)と題する著作の写本の中に見出され、〃世界のさまざまな空想的図解〃と性格づけられた。(10) プレの著作の二三頁の第四図に複製されたチベット仏教資料による宇宙誌的地図は、(ヲ) その起源が確かにインドにあるということで興味がある。しかしながら Journal of the Asiatic Society of Bengal, Vol. LXIV, Part i, 1895, Plate XXVI に発表されたラサ大伽藍のスケッチの如きチベットの絵が、インド思想と同じであったか否かをいうのはむつかしい。プレの本の二五頁第五図〔前頁下図参照〕は、ヒンドゥの瞻部洲とその周囲の地図である。(ワ) これはやや異った種類のものである。卵形の島が、graha〔九曜星〕をあらわす九つの円によって取巻かれる。それを取巻く他の一列は、おのおの卵形の中に収められる一二の rāśis〔十二宮〕である。第六図(カ)（二九頁）は navakhaṇḍa〔九つの部分〕すなわちインドの九区分をあらわす。第一〇図(ヨ)（三六頁）と第一一図（三七頁）〔上図参照〕は、ともにウィルフォード〔論文〕から転写された瞻部洲図である。これらは古代インド人のやや異る二つの宇宙観に従って書かれている。プレはまた Rennell と Santarem〔の報告〕を拠り所として(11)、Monghyr(タ) で発見された銅板彫刻の古い地理学的地図について述べる。(12)(レ)

プレの著作の中の、ペルシャやアラビアの資料によるインド地図学を扱った第七篇（二三九～五八頁）には、興味ある数個の地図がある。一四二頁の第三五図は、古いペルシャの地球の図によってインドを示す。イブン・ハウカル (Ibn Haukal) の地



Pullé の第11図— ウィルフォードによる瞻部洲

図（九七五A・D・）が一四七頁の第三六図に、イドリシ（Edrisi）の地図（一一五四A・D・）が一五六頁の第三七図に示される。(ソ)

インドの人々特に南部のドラヴィダ人の地図製作の知識に関しては、Encyclopaedia Britannica（一四版、一四巻、八四〇～四一頁）の以下引用する意見が面白い。〃中世のインド洋航海者たち――アラビア人、ペルシャ人、ドラヴィダ人――に用いられた海図は地中海の海図よりすぐれていないにしても、価値においては同等であった。マルコ・ポーロ（一三世紀）はこうした海図について述べているし、ヴァスコ・ダ・ガマ（一四九八年）はインド人パイロットがそれを手にしているのに気づいている。その性質は、一五八四年トルコの提督 Sidi 'Ali Ben Hosein が古代の資料から編集した海事百科すなわち Mohit の中で十分明らかにされている。これらの海図は互いに直角に交わる精密な直線の網で覆われる。水平の線が平行圏で、それは北極星、小熊座のこうし、大熊座の手押車の地平線からの高さに基いている。この高さは isba〔指〕であらわされるが、一指は 1° 42′ 50″ にあたる。(ツ) 指はさらにその 1/8 の zam に分けられる。それ故二本の平行圏の間隔は、12′ 51″ となる。この間隔は時として、ポルトガル人によって誤られ、北緯 2′ 13″ のマラッカを、Cantino の海図（一五〇二年）では、南緯 14′ に置いたほどである。トレミー（Ptolemy 西暦二世紀）がタプロバーネ（Taprobane）すなわちセイロン島の大きさを、かなり過大視したことの説明となるようなこの種の地図があったかも知れない。風上と風下の地域を分ける本初子午線は、Ras Kumhari（コモリン岬）を通っていた。またそれは神聖都市ウジャイン(ネ)（Ujjain トレミーの Ozéné）を通る、インド天文学者の本初子午線、すなわちアラビア人のいう Azin 子午線とほぼ同じであった。他の子午線は三時間の航海に等しいと考えられる zam の間隔でもって引かれた。〃 インド人が早く西歴紀元のはじめに、地図製作の知識を有していたこと、島や陸地を含むインド洋の海図に関しては、アラビア人やギリシャ人はインド人の恩恵を蒙ったことなどが、示唆されるように思われる。

原註

(1) Journ. As. Soc., Letters, Vol. XIX, 1953, p. 38 を見よ。
(2) S. Ray 編、一九三四年カルカッタ刊一〇六頁。
(3) 同 一二一頁。
(4) Asiatic Researches, Vol. VIII, 1805, pp. 270～71; cf. pp. 267～334; Vol. X, pp. 127～57.
〔同誌八～一〇巻にわたるウィルフォードの論考の標題は、F. Wilford: An Essay on the Sacred Isles in the West, with other Essays connected with that Work. で、Part I, ch. 1, Of the Geographical Systems of the Hindus (pp. 267～375) にインドの地理的世界観が扱われる。

なお訳者が参照した京大人文研所蔵の Asiatic Researches（一名 Transactions of the Society Instituted in Bengal）は、サーカーやフィリモアの記載とちがって、刊年は第八巻一八〇八年、第九巻一八〇九年、第一〇巻一八一一年で、いずれもロンドン版である。プレは刊行地をカルカッタとするから、京大所蔵本は恐らくその覆刻版であろう。〕

(5) Studi Italiani di Filologia Indo-Iranica, Vol. IV, Firenze, 1901.

〔プレの「インド古代地図学」は彼の編集になる同書第四巻（一九〇一年）と第五巻（一九〇五年）に収められるが、おもに西洋製の古地図におけるインドについて述べたものである。〕

(6) 同　八—四四頁を見よ。

(7) 一六頁の第二図、三三頁の第八図。

(8) Stein, Raj. tar., trans., Vol. II, p. 313.

(9) 三四頁の第九図

(10) Asiatic Researches, Vol. VIII, p. 269.

(11) 〔Santarem:〕 Cosmographie et Cartographie, Paris, 1852, Vol. I, p. 364.

(12) 〔F. L. Pullé〕 一二頁。

訳注

(イ) 新唐書　巻一二一　西域伝上。

（貞観）二十二年、遣右衛率府長史王玄策使其国、以蔣師仁為副。

（中略）東天竺王尸鳩摩、送牛馬三万、餽軍及弓刀宝纓絡、迦没路国獻異物、并上地図、請老子象。

(ロ) バーヴァブーティは八世紀の有名な戯曲作家で、ウジャインかまたはその近くに住んでいたらしい。この戯曲は現存最高の梵語戯曲といわれる彼の三部作の一つである。　J. Dowson: A Classical Dictionary of Hindu Mythology, 1957.（以下古いインドの固有名詞に関する訳注は、殆どこれによった。）

(ハ) 半島南部のマイソール（Mysore）州にあったと考えられる国。

(ニ) デカン高原中央部を東南流する川。

(ホ) ダンダカ森の中の場所の名。

(ヘ) フィリモアの書簡でもわかるが、初代インド総督の Warren Hastings（一七三二～一八一八）。

(ト) プレによれば、一種の宇宙誌百科で、フィレンツェの Biblioteca Nazionale Centrale の De Gubernatis コレクション中にあるという。

(チ) 同じく右のコレクション中にあるという。

(リ) その第八図と同種のものである。

(ヌ) フィリモアの書簡にいうグラッドウィン訳本第一巻口絵のバラモンの世界図のことであろう。なおこの訳本の刊年・巻数等は次の通りである。

F. Gladwin: Ain-i Akbari, 2 Vols., 1800.（アジア史講座　第五巻　南アジア史　一九五七年　二一二頁による）。

(ル) ウィルフォードによれば、ジャイナ教の地理学的小冊子で、終りには世界とメル山（須弥山）の空想的図解を伴う豊富な注釈がつけてあるという。

(ヲ) かつてわが国でも広く行なわれた須弥山世界図の一種で、同じ図は W. Kirfel: Die Kosmographie der Inder, 1920, Reprint 1967 にも掲げられるが、それは A. A. Georgi: Alphabetum Thibetanum, Rom, 1762 からの引用である。なお堅月仏教大辞典第三巻（昭和八年）に、キルフェルからとったこの図（図版第七五八）がある。

(ワ) この図は J. Lelewel: Géographie du Moyen Age, Brussels, 1852～57, Atlas, 1850 の図版第四の "Imago Cosmographica Hindorum" と題される図である。

(カ) 九区分をあらわす八花弁の花を、近代的インド図に重ね合わせた

もの。

（ヨ）メル山を蓮の花托に、各地方をその花弁に見たてて描いた瞻部洲の島嶼図。

（タ）ビハール州パトナ東方ガンジス川沿岸の町。

（レ）プレによれば、Santarem はレンネルの報告を引用しており、西暦一世紀かそれよりやや新しいものであり、土地贈与書などに添えられたものであろうという。

（ソ）これらの諸図はイスラム系の世界図であって、その一部にインドが表現されているに過ぎない。

（ツ）アラビアで緯度をあらわすのに用いられた単位で、二二四指が三六〇度であったという。

今井溱　アラビア科学　アジア歴史事典 第一巻 一九五九年

（ネ）アーメダバードの東方約三〇〇キロにある町。古く Vikramāditya 王が都したところで、神聖な七都市の一つであった。

（大阪大学助教授）